

20170514 「パウロが語るアブラハム」

目標：アブラハムのイサク奉獻の故事の背後にあった信仰に触れ、信仰義認で問われている「信仰」の深みを知る。

聖書箇所：ローマ4：1～25 時間：10分

暗誦聖句：「彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じたのである」（ローマ4：17）

道具：ホワイトボード、ペン

対象者：中1×1 小6×1 小4×3 小3×2 小2×1 小1×2 未就園児×1

留意点：子どもたちはローマ書とアブラハムの関連性を述べる必然性を覚えないだろう。旧約の代表的人物も信仰により義と認められている故に、信じて救われようという流れで進める。

段階	時間	教師から	子供に予想される反応	備考
課題確認	2分	ローマ書を一緒に学んできています。ローマ書の大きなテーマは「信仰義認」です。信仰義認とは、イエス様を救い主と信じるなら救われますと言うことです。ですから、信仰が大切なのですが、これは、聖書の最初から、言われてきたことなんだと言うことを今日は学んでいきたいと思います。アブラハムを知っていますか？		「信仰義認」を板書する 信仰義認の内容について、もし可能ならば質問し、子どもたちからの答えとして内容の板書をしたい。アブラハムとローマ書との関連をここで打ち出す。
課題探究	6分	アブラハムで覚えている事は何か。 モリヤの山で、アブラハムとイサクはどのような事をして、そしてどうなったのでしょうか アブラハムは命令をもらった時、イサクが助かった時、どう思ったでしょうね。 このときのアブラハムの心の中について、ローマ書でパウロは（暗唱聖句）のように言っています。アブラハムは、イサクを献げよと言われた時、既に死んだ存在となっていたのです。しかし一方、神様はイサクから救い主が出ると約束していました。そこでアブラハムは、イサクが死んでもなお生きたイサクが出てくるような事を神様はなさるんだろうと信じたのです。 そうでなければ、彼はイサクを殺そうとなんてしなかっただろうと言うのです。 先生はイエス様を信じてほしいとよくいいますね。どれくらい信じてほしいかというと、アブラハムのようにまで信じてほしいと思っています。	<ul style="list-style-type: none"> ・知っている ・なかなか子どもが出来なかった ・エジプトに行った。 ・墓を買った。 ・お金持ち ・メソポタミア出身 ・神様の友達 ・アブラハムが神様にイサクを献げよと言われて、献げた。 ・天使が止めて、イサクは助かった。 ・ひどい ・良かった 	知らないとは想定しにくい。 いろいろ挙がると思われる。イサク奉獻の出来事を挙げてほしいが、挙がらなければ、こちらから提示する。イサク奉獻の提示の際には、今日はこのことを扱う事を明言すれば、いろいろ挙げたのにと云った不満は消えるだろう。 出来事を思い出させる。 アブラハムの心の動きを意識させる。 暗唱聖句を一緒に読む。 どういう意味か問うた上で、教師から解説する。復活信仰そのものである。これは、大方の子どもたちには理解できない可能性がある。しかし、神様は、私達の理解を超えて素晴らしいことをして下さるのだという印象が残るだけでも、このアブラハムの信仰に触れる価値はある。
まとめ	2分	先生にもこういうことがありました。 皆さん是非イエス様を救い主を、アブラハムのように、深く信じてほしいと思います。アブラハムのような祝福が、みんなを待っていますよ。 暗誦聖句		アブラハム以上にと云っても構わないのだが、話しが広がりすぎると思うので、左記の表現にした。 反応は、問わない。印象付けば十分である。 現代でもそういうことは起きることを、教師の実体験（聖書学院で教師経験を献げた話）から話し、机上の空論ではないことを印象づける。 189号のテーマ「神の恵みに生かされる」からの反映。